Big-Five 尺度短縮版の作成 (4)

—多母集団同時分析による因子構造の安定性の検討—

○谷 伊織¹・脇田貴文²・熊谷龍一³・中根 愛⁴・並川 努⁵・野口裕之⁵

(¹浜松医科大学子ども心の発達研究センター・²関西大学社会学部・

³東北大学大学院教育学研究科・⁴NTT サイバーソリューション研究所・⁵名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

キーワード: 性格特性 ビッグファイブ 因子分析

Development of a short-form for the Big Five scale

Iori TANI¹, Takafumi WAKITA², Ryuichi KUMAGAI³, Ai NAKANE⁴, Tsutomu NAMIKAWA⁵ and Hiroyuki NOGUCHI⁵

(¹ Hamamatsu University School of Medicine Research Center for Child Mental Development,

²Faculty of Sociology, Kansai University, ³ Graduate School of Education, Tohoku University, ⁴NTT Cyber Solutions Laboratories,

⁵Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

Key words: Personality trait, Big-Five, factor analysis

目 的

パーソナリティの 5 因子モデルは多くの文化においてその構造が再現されることが知られており、このモデルに基づいた尺度を用いてさまざまな対象についてのパーソナリティに関する検討が行われている。たとえば、発達に関する研究では、Roberts, Walton, & Viechtbauer (2006) はこの枠組みによってメタ分析を行い、多数の研究結果を統合し、パーソナリティの発達の様相を示している。このような研究が可能となる根拠の一つはその因子構造の安定性や再現性にあると考えられるが、複数の年齢帯や性別の集団を通して、安定して因子構造が見られるのかどうかを示した研究はあまりみられない。そこで、本研究では、いくつかの集団の因子構造を検討するために多母集団同時分析を行い、性別や年齢帯を通した性格特性の 5 因子の構造についての検討を行う。また、谷他 (2010) では、和田 (1996) の Big-Five 尺度 60 項目を用いた検討を行っているが、大規模なデータを収集していく上では、短縮版の使用が有効であると考えられるため、本研究では谷ほか (2010) による Big-Five 尺度短縮版を用いて因子構造についての検討を行うことを目的とする。

方 法

調査対象者 青年期から成人期の 3473 名 (男性 1568 名、女性 1905 名) を対象とした。年齢は 15 歳から 49 歳までの平均 24.65 歳 (SD=8.41) であり、年齢別の内訳は 10 代 1472 名、20 代 1041 名、30 代 717 名、40 代 243 名であった。

質問紙 和田 (1996) の Big-Five 尺度を短縮した Big-Five 短縮版 (谷ほか, 2010) を用いた。回答選択枝は、“非常にあてはまる” “かなりあてはまる” “ややあてはまる” “どちらともいえない” “あまりあてはまらない” “ほとんどあてはまらない” “まったくあてはまらない” の 7 件法であった。

結 果 と 考 察

まず、全データを対象として行った探索的因子分析の結果、想定どおりの 5 因子構造が得られた。さらに構造方程式モデル (SEM) を用いて確認的分析を行い、男女別の多母集団同時分析を行った。欠損値は完全情報最尤推定法 (FIML) によって推定し、補完した。最終的なモデルにおいて表 1 の結果が得られた。適合度指標の値は、いずれもモデルとデータの適合が良好であることを示した。続いて、年代別の多母集団同時分析を行った。性別と同様に、欠損値は完全情報最尤推定法 (FIML) によって推定した。こちらについても、性別ごとの分析と同様に、適合度指標の値は良好であり、いずれもモデルとデータの適合が良好であることを示した。多母集団同時分析を用いることによって、異なる集団の因子構造につ

いて検討できるが、本研究の結果からもパーソナリティ尺度の交差妥当性などの検討に有用性を持つことが認められた。また、その結果、Big-Five 尺度短縮版を発達研究等の文脈で用いられる可能性が示唆された。

Table 1 性別ごとのビッグファイブ尺度短縮版の
確認的因子分析の結果

	男性					女性				
	N	E	O	C	A	N	E	O	C	A
不安になりやすい	.83					.85				
心配性	.72					.78				
弱気になる	.75					.75				
緊張しやすい	.51					.49				
憂鬱な	.63					.65				
話好き		.62					.59			
無口な		.71					.66			
陽気な		.71					.68			
外向的		.76					.82			
社交的		.76					.82			
独創的			.56					.52		
多才の			.66					.68		
進歩的			.65					.65		
頭の回転の速い			.62					.65		
興味の広い			.57					.50		
好奇心が強い			.58					.48		
いい加減な				.75					.75	
ルーズな				.69					.68	
怠惰な				.70					.70	
成り行きまかせ				.62					.57	
計画性のある				.52					.51	
軽率な				.61					.56	
几帳面な				.39					.43	
温和な					.52					.60
短気					.78					.73
怒りっぽい					.79					.76
寛大な					.46					.48
親切的な					.38					.40
自己中心的					.53					.58
因子間相関										
N		-.35	-.25	-.27	-.33		-.36	-.22	-.14	-.29
E			.59	.19	.20			.55	.19	.22
O				.21	.17				.27	.18
C					.37					.46
A										
CFI						.77				
RMSEA						.05				

引用文献

Roberts, B. W., Walton, K. E., & Viechtbauer, W. (2006). Patterns of mean-level change in personality traits across the life course: A meta analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, 132, 3-27.

和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.